

〔解説〕 いつだつたか正確には覚えていないが、中村吉治先生の紹介で『信州白権』を主宰している宮坂栄一氏にお会いした。宮坂氏は大正の終り頃、仏蘭西書院を経営し、有賀喜左衛門先生と古いゆかりがあつたことから、有賀先生の没後、『信州白権』で有賀先生の特輯号を出ししたいということで、中村先生に相談にこられたので、中村先生は私を宮坂氏に引き合させ、協力してやってくれということであつた。私の協力といつても、村研関係で有賀先生の学恩をこなむつたと思われる方々のリストを作り、宮坂氏にわたしたぐらいいのことであったが、そのうち、宮坂氏が鬼籍に入られ、中村先生も間もなく世をさられた。『信州白権』の特集号は、宮坂氏の没後、関係者の努力で、一九八八年二月に銀河書房から「有賀喜左衛門・岡正雄特集」という形で刊行されたのであるが、それには中村先生のものは載っていない。私も中村先生が亡くなられてから、遺稿の整理をさせていただいたが、実はそのときは、この原稿を発見することができなかつた。その後、大分経つてから、中村先生の長女の小松啓さんから、家のなかを整理したら出て来たということで、何冊かの大学ノートと一括の原稿をお預りした。そのなかに、この原稿があつたわけであるが、村研にお有賀先生・中村先生の警咳に接した方も多く、また内容的にもふさわしいと思われるので、『研究通信』への掲載をお願いした次第である。なお、原稿のなかに、もう一点、『信州白権』用に書いたものがあつたが、この方はやはり両先生がしばしば執筆をしていた『伊那路』の方に掲載をお願いした。中村先生が『信州白権』用に二つの有賀先生に関する原稿を書いていたのは、多分、私がお伺いしたときにも、私にみせて選択をさせるつもりであったかも知れない。私としては、両方を読み、どちらも捨て難い味があると思われたので、このような措置をとることにした。

(岩本　由輝)